

三好達治全集

8

三好達治全集



筑摩書房

著 者 三 好 達 治

發行者 古 田 晁

發行所 筑 摩 書 房

東京都千代田區神田小川町二ノ八

電話東京 〇七五六一(代表)
振替 東京 四 一 二 三

印刷 株式會社 精 興 社
製本 株式會社 鈴木製本所

三好達治全集第八卷目次

なつかしい日本……………九

同感異見

詩人の生活……………八五

詩の稿料に就て……………六〇

寸感一束……………五五

現地報告の價值 奇妙な支那人 支那語 語學と文
學 偏奇漢趣味 詩人の獨語 聖なるもの 事變に
關する詩歌 雜誌小説の銓衡 日常語 一隻語 木
に竹を繼ぐ 書名の改稱 苦言

軍歌雜記……………一〇九

文學と私の生活……………一四

學生といふもの……………一八

艸舍雜感……………三〇

感興の把持……………三五

柏車……………三九

燈下雜感	二三
日本人の郷愁	二三
略記	二四
同感異見	二五
文部省の詩感	二七
言葉	二九
春の日のとりとめもなき感想	二〇二
東京雜記	二〇六
ハチ公と澁谷驛前	〃お待ちどほさま〃
りますね	〃よく降
天皇をめぐる人々	二二一
春宵雜話	二三
外から見た日本	二五
「文化の日」に	二三
私の信條	二三四

お花見階級	三三九
日用語雑感	二四七
私一箇の場合	二五八
観映畫雑感	二六五
堅忍持久	二六八
敬語について	二七三
世上雜觀	二七五
教科書に關する雜感覺え書	三〇一
初夏	三〇五
につぼん國	三〇八
雜感	三二一
日本の美しさ	三三七
浪花節のいや味	三三九
雜感	三三一
燈下言	三三六

陽春某日……………三三九

きのうきよう……………三四二

球宴 杞憂? 瑣事 ハンバその他 アマチュアリ

ズム 參宮 世相 遠すぎる ペテラン 空想

「イヌ」にも 「イヌにも」 ふたたび 氣が重い 推

量 秋日和 肩書き 偶感 隅田公園にて トリま

うで 特車 午前四時 援農者 偶感 窓さき 冬

の日 歳晚

某日……………三七六

耳……………三七九

偶語……………三八三

月の十日……………三八七

解題……………四九九

なつかしい日本

まへおき

なつかしい日本、かういふ題で私はこれから月々いくらかの文章を書きつけてゆかうと思ふ。

それはこの雑誌の編輯者の私に命ずるところであり、私自身もまた今日のやうなかういふ機會にそれを自ら希望してゐない譯ではない。なつかしい日本、なつかしくゆかしい日本、ただこの一語を提出しただけでも私たちの心はすでにほのかな郷愁をおぼえる。私ははからずもいま郷愁といふ語を筆にしたが、私たちのなつかしい日本は、今日では私たちの身邊から、それほど遠く見失はれてゐるのを覺える。私の唯今用ひてゐる萬年筆は鹿児島地方の製品であるが、ペン尖が原稿用紙にそそくさつつかかり易く、インクが枯渴をしたりまたぼたりと大きな雫になつて紙の上に落ちたりする。またそれは軸のところの外殻と内部とが離れ離れになつてぐるぐると廻るので頗る勝手が悪く氣持が悪い。手先の器用を稱される日本人がこのやうな萬年筆を作るのは腑に落ちない話である。もしこれ位のものをしかせいぜいのところ作れないのだとすると製作者の知能が疑はれる。もつと熱心に本氣になつてやればもつといいものが出来るのをそれ位のところで多寡をくくつて市場に出したのだとすれば彼の怠慢が憎らしい。その上この萬年筆は外見だけはひとかど立派に出来てゐる。この萬年筆で一番立派に出来てゐるところはその見せかけの外装の部分だといつていい。英語で綴つた刻印なんかもなかなか洒落てゐるのである。かういふ萬年筆でなつかしい日本といふ文章をつづるのは、まづその足もと——手もとに於て若干の障礙を覺えないではゐられない。

私ははからずもこの文章の冒頭から、私の粗惡な萬年筆に就て、小言をのべることとなつたが、これは決して今日の流行に倣つて、他を嘲つて自らに快をとらうと欲したのではない。

戦後軍部や政界財閥等指導層の暴露記事が日日の新聞面に充満して惡どく刺戟的に書きたてられてゐる。私などもつい又かと思ひつつもそれらの記事には眼をさそはれ易くて讀みふけることが多い。戦敗國民の私たちとしては、なぜ戦さにやぶれたか、どのやうにして戦争に敗れたかといふことは、またそれにもまさつて、なぜ戦さが起つたか、どのやうにして戦争が起らなければならなくなつたかといふことは、唯今もつとも知りたい事柄に相違ない。またもつともその真相を知つておかなければならない緊急切實な事實に相違ない。戦時中私たちはその私たちの携つてゐる限られた小さな正面の外、外界に就てはほとんど眼かくしをされてゐた。その反動もあつて私たちの好奇心は異常に昂奮して、過去のその部分の暗黒地帯に、むかつて集中しようとする。それも勢ひの自然であつて、それはそれでよろしいし、又それは決して必ずしもむだな徒事でもない。私はそれらの暴露記事をだから悉く歡迎もしないが又悉く擧蹙して斥ける者でもない。

けれども常にきまつて、それらの記事には私の耐へがたく思ふ一つの氣味合ひがひそんでゐる。

その氣味合ひはまた、今日まで秘められてゐた味方の敗戦記事や、或は日本軍將兵の演じた殘虐行為の暴露記事等の間にも、或は露骨或は隱密に行文のかげに、ほとんどいつの場合にも看取される。私のその氣味合ひといふのは、記者が心の片隅にかくしもつてゐる「自嘲」の氣分をいふのである。記者はその氣分を、短波發信器を操るやうな風にもものかげから操作して、讀者の方の同質の氣分に呼びかけようと、——これは半無意識にさうしてゐるやうに見うけられる。もしも私のこの觀測

が見當違ひでないならば、毎朝の新聞記事を読む大多數の讀者の心のどこかには、この「自嘲」の心持が——實は彼らの側に深くかくれて潜んでゐるといつていい。さういふ結論ともなるのである。この「自嘲」は敗者の餘儀ない「苦笑」といふのとはいささか趣がちがつてゐる。「苦笑」には内にむかつてまつすぐに自分自身に正面した單純さがあるとすれば、この「自嘲」には一應は自分自身の姿にむきあつたその眼で同時に何ものか他を睨んでゐる、尻眼つかひの複雑さか——卑しさがつきまとつてゐる。人は決して自分自身を「嘲る」ものではない。「自嘲」はつねに見せかけにすぎない。

私の耐へがたく思ふ一つの氣味合ひといふのはこの「嘲り」である。憤慨も悔恨も或は羞恥も、それらには常に魂の溫度が失はれてゐないといふ點で、それらは道德的にいつて健康さを失つてゐない。それにくらべると「嘲る」心はつめたい。自らを嘲る——嘲るふりをする心持は、つめたい心の上に常に虚偽を意識してゐる。當然憤慨すべき時、悔恨すべき時、或は羞恥すべき時に、「自嘲」の影がさすといふのは、もともと根柢のたしかさの上に立つてゐない、虚偽の意識を意味してゐる。

「なつかしい日本」——とわづかにこの一語をかがげようとしてさへ、すぐ唯今の私たちの意識には、いつかうなつかしからぬ日本の姿のみがつぎつぎと連續して浮び上つてくる。支那事變以來數年間の激戦混戦惡戦の間に、私たちの心はどれほど疲弊してゐるか、それはまたその後の終局の敗戦によつて、敗戦後の窮迫によつて、如何にいつそう荒廢に瀕しつつかあるか、唯今のやうな萬事に冷靜を失ひ勝ちな世相に於ては、自らの精神狀態をさへも靜かに反省することが實は困難に近い。

明日の再建に最も必要な精神の冷靜と根柢のたしかな自尊心とは、この際に最も見失はれ易い危険にある。母國の姿が一種幻覺的に、ことごとくいつかうなつかしからぬ暈翳を伴つて、私たちの視界に上らうとするのは、實は私たちの精神が現在甚だしく疲勞してゐるための病的な假幻作用によつて、恐怖的に、そのやうにそそのかされてゐないものとも限らない。さうしてまたその傾向は、現在に於てよりも將來に於て、一層危險に惡化しさうな條件を、具へてゐるさうにも危ふまれる。これは私の杞憂であるが、つひに杞憂に終れば幸せである。

○

愛國心といふものは、本來愛さるべき價值のある國土にむかつてしか發動しない。歴史、習慣、文化、同胞、或は物質的な財産すべて、それらが我々の愛情を喚びささない時に、われわれはこのわれわれの國土に對してすら愛國心を覺えることはできない。われわれがこの國土をわれわれの母國とするのは、運命である。われわれは必ずしも運命を愛しない者ではない。しかし愛情は單なる運命の神によつてその上に繋ぎとめられるものではない。愛情は多くの善意の積み重ねによつて培かはれた豊かな土壌の上にしか育たない纖細で敏感な萎れ易い植物である。

愛情はまた昂奮を必要とする。昂奮を伴はない愛情、靜かな佛陀の愛情のやうなのは、それは慈悲憐憫とこそいふべきであつて、ここでいふ愛情、愛國心などとは何のかかはりもない。

愛國心も愛情であるかぎりには、それにふさはしい高い昂奮を、高貴な想像力の麵麴種を必要とする。愛情はまた未來の翹望を必要とする。凡そ人は若い娘と結婚したがるではないか。國土に對す

る愛情もまた、その過去にむかつてよりも、その將來にむかつて想像の翼を張つてゐるのを健全の姿としたい。そこで私はかねがね奇異に思つてゐた一事がある。

ひと頃は古事記や日本書紀の註釋本が市場に氾濫した。書肆の店頭を半ば占領したのはその種の書物であつた。文部省あたりからも流通目あての粗惡本が刊行されたかと記憶する。利にさとい書店書房が臂馬にのつたのは無理もない時勢であつた。

この種の古典が盛行したのは、いふまでもなく國民思想の涵養がその表看板で、言葉をかへていふと戰時用愛國心の昂揚を専ら目ざしたものであつた。

私は古典の學には全くの門外漢で、當時世に流布した諸本の註釋が、どの程度に穩健妥當のものか、どの程度に或は牽強附會のものを知らない。けれども私は私の常識で讀み得た原典の感じから率直にいふと、あの兵馬倥傯の際に古事記や日本書紀の煎藥を、萬能藥として國民にふれまはつたのは、一部狂信者の手前勝手な思ひつきかと推察されるが、結果は無害無益でいつかう藥の効き目はなかつたことかと考へられる。そのみではない、あの際あの無害無益の處方をやうやく考へつた當路の役人衆は、平素はいかばかり國民思想の涵養を怠つてゐたか、國民思想の涵養そのことに就て如何に無智で暗愚であつたかを、問はず語りに語つてゐるかの觀があつた。

私は彼らの處方が無害無益でいつかな効き目はなかつただらうと、大膽に推斷した。理由は外でもない、記紀兩書とも、今日のわれわれのために愛國心を鼓舞する要素は缺けてゐる、著しく缺けてゐるからである。歴史を學べば勿論國土への愛情を増すには相違ない——原則として、けれどもそのためには何よりもその歴史が精確なることを要する。またその歴史が一定距離以上の、遼遠感

を起させないのを適當とする。またその歴史が、我々に道義的美的昂奮を覺えしめることを要する。またその歴史が我々の明日に就て、高い高貴な想像力を刺戟し喚起することを要する。等々。これらの要點は、ことごとく記紀兩書に缺けてゐるところである。兩書の雰圍氣は、寧ろこれらの要點をことごとく缺如してゐるところにその特徴がある。これらの兩古典は、太古邈漠の世を語りついでゐる點で、なるほど國土の杳然として淵源するところ遠きを思はしめる長所はある。しかし國土の杳然として見はるかす難い古へを想察することは、必ずしも今日の我々に勇氣を——戰鬪的勇氣を覺えしめるとは限らない。今日我々の必要とする智慧道德勇氣想像力は、我々の遠つ御祖の古傳説を諷誦して好古の癖に耽ることとは、殆んど無縁の別趣の性質のものといつていい。一部狂信家の牽強附會は、どのやうな空中樓閣を捏しあげるかは知らない。けれどもそれらは人性の法則、愛情の法則とは、恐らく懸絶してゐるに相違ない。愛情は牽強附會によつては鼓舞されない。愛情はまた、過去にむかつて自己満足の名目を（それらは單に名目にすぎない）探し求めて、それによつて現在を價值あるものと考へるよりも、さらにいつそう熱心に、將來にむかつて描き上げた構想の、前方からの反映を現在にとり入れることによつて、現在を愛すべきものと考へるだらう。それが眞の、生命ある愛情の性質だらうと思はれる。

私には先頃行はれた記紀兩書の流行と國民思想涵養の宣傳とは、寧ろそれ自身國土に對する愛情の貧しさ國民思想の枯渴を物語つてゐる奇異なる證左のやうに當時しきりに考へられてならなかつた。その考へは今日と雖もいささかも變るところがない。

眞の愛情にはあのやうに間拔けたところはない。